



## 報告 13年後の東京電力福島第一原発の周辺地域を視察

# 東海第二原発の再稼働は「認められない決意」固める

「さよなら原発いばらきネットワーク」(略称:さよ原)主催による「福島ツアー」に参加しました。小雨降る4月6日(土)、19人が乗車したバスは8時30分水戸駅南口を出発。

常磐自動車道を北上し、櫛葉町にある宝鏡寺の勾配のきつい石段を上がると「非核の火」と「原発悔恨・伝言の碑」が迎えてくれました。宝鏡寺の一角に原発関連や原爆被害等を展示している「伝言館」があります。

伝言館は、宝鏡寺前住職の早川篤雄さんによって設立されています。早川さんは県立高校の国語教師として働きながら、1970年代から反原発の闘争を続け、2022年12月に亡くなりました。そのあとを引き継いだ丹治杉江さんは、原発事故賠償訴訟群馬原告団代表として10年間裁判闘争を闘いました。

▼上下とも伝言館

現在は、避難先の群馬県からいわき市に戻り、片道80kmを往復しながら「伝言館」を管理しているとのこと。いわき市は全国で一番「心筋梗塞で亡くなる人の率が高い」などご自身の低線量内部被曝についても語られました。また「歩く風評加害者」とレッテルを張られ、「もの言えぬ被災者」という場面が多くなったと言われました。

「伝言館」での昼食後、丹治さんの案内で「帰宅困難区域」のど真ん中に56億円の費用で建てられた小中学校施設の「学び舎ゆめの森」(通学者50人 大熊町)、放射線量が高く無人と化した大堀相馬焼の里(浪江町)、福島第一原発から5km「圏内」にある「休校」中の県立双葉高校や午後2時46分で止まったままの時計がある



旧双葉町役所などを見学しました。双葉高校の校庭には雑草や松などが生い茂り、かつて甲子園大会に出場したこともある野球練習場の面影は微塵もありませんでした。愛でる人もいない川べりの桜並木は、いつもの春の

ように咲き誇っていました。これが「原発事故の未来予想図」と何度も丹治さんは説明しました。

バスは「避難指示が継続している帰還困難区域」「特定復興再生拠点区域」「避難指示解除区域」とまだら模様に入り組んだ集落を通過しながら移動しました。住居跡、更地、廃屋、バラ園の廃墟、商店を解体して街並みが消えた通り、作業員用の住宅、公営住宅、太陽光パネル群、「帰還困難区域」で生活している人、ガソリンスタンドもなくデイリーヤマザキしかない地区、そちらこちらにある立ち入り禁止看板。地震と津波だけなら「復旧」したかもしれない日常生活が原発事故によって13年経っても「暮しを根こそぎ奪われてしまった」事実を複雑な思いを抱きながら視察しました。

双葉駅前の商店街入口に掲げられていた「原子力明るい未来のエネルギー」看板は撤去されていました。撤去すべきは「明るい未来」という希望を奪った原発です。帰路の車中、「福島ツアー」企画した「さよ原」のみなさんに感謝しつつ感想を述べ合いました。「終わらない福島第一原発事故の被災地実態」に生々しく接し、地震列島に原発はならない、東海第二原発の再稼働は認められない、と運動を広げる決意を固めました。

〈報告: 篠原 睦〉

### －「伝言館」で出会った短歌を紹介します－

「このことも できなくなったが 手にはまだ  
平和を守る 一票がある」 八坂スミ 94歳

- ◆ 納税の意欲が失せる不適材
- ◆ 物言えば 声も凍るか露西亜国
- ◆ ヒトラーのホロコーストをガザで真似
- ◆ 追い詰めて一網打尽かラファの街
- ◆ 独裁は毒殺なんてちよるいもの
- 福家駿吉(ふけ しゅんきち)さん  
(治安維持法国賠同盟春日部支部長)
- ◆ 汚染水 海が 最終処分場
- ◆ いいなりは 米に急がされ 戦の支度
- ◆ ジェノサイド ガザに目瞑(めつぶ)る

\*那珂平和委員会の川又俊水さんご紹介  
(川又さんの奥さんの兄上)です。

議長団

川柳コーナー

■ 浅野義雄さん(石岡)